

Dr.ひろみの

ハッピー子育てひろば



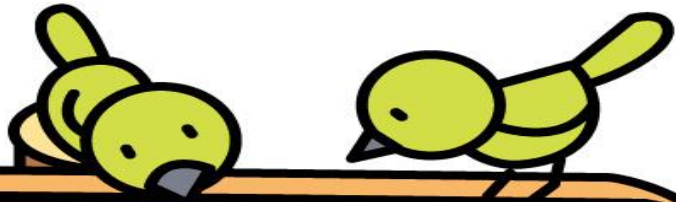
☆プロフィール☆
鈴木 裕美 (すずき ひろみ)
香川大学医学部 小児科専門医

みなさん、香川大学医学部の鈴木です。お元気ですか。先月は医学部4年生の社会医学実習を実施しました。自分が好きなテーマで好きなところに学生を連れていけるので、毎年楽しみです。その中でNPO法人ペアレントメンターかがわさんのメンターの方々にお話を聞く機会があります。メンターさんは発達障害を持つ子どもを育てる親御さんで、研修を受けて相談員となり、現在困っている親御さん方の相談に乗っています。周囲から十分理解されず支援を受けられない中、子どものために試行錯誤し、悩みながら親子で成長するお話に感銘をうけます。当事者同士の交流会やメンターへの相談会もあるので、必要な方はぜひご参加ください。

思春期の目的は、自分を確立し、自立する準備をすること

そのためには **自己受容、自分探し、親離れ**という課題をクリアすることが必要です。

今回は2番目の『自分探し』です。



親は子どもにいろいろなことを期待しています。子どもの能力では難しいこと、興味のないことができるようにと期待されるのもつらいですし、やりたいと思ったことを無理だ、やめておけとマイナス方向に期待されるのもつらいです。また、子どもは親の価値観にどっぷりつかって育っているので、親の職業や生き様に良くも悪くも影響されるものです。

『自分探しは、**自分の意思で自分の道を模索し、決める行為**』です。親の意見を大きく取り入れた決定は、不本意な結果となったときに親子の間に修復しがたい溝を生んでしまいます。「本当はそんなことしたくなかった。親のせいでの人生は台無しだ」と。子どもにとって、主体的に進路選択ができなかったことが、生きることを困難にすることもあります。

中高生くらいでは、将来どんなことがやりたいかなんてわからないことがほとんどです。**子どものいいところや特徴を言葉**にして、「人の話を優しく聴けるから、人を助ける仕事が向いてるかもね」とか「スポーツが好きだから、スポーツに関わる仕事だと楽しそうだね。どんなものがあるか調べてみようか？」くらいの会話ができるといいですね。

ほんやりとでも方向性が見いだされると、今やるべきことに対するモチベーションが生まれます。「何になってもいいようにとりあえず勉強」という考えは、多くの子どもに受け入れられるものではありません。現実的にどこの高校にするかという話になると思いますが、どんな高校生活を送りたいか**具体的にイメージした上で子どもの希望を尊重**できると「自分探し」の課題（**自分で自分の道を決める**）をクリアしやすくなります。

「**自分が決めた**」という実感は、「**自分の人生に責任を持つ**」ことにつながりますものね。

子どもの希望が親と同じだった場合、本当かどうか疑った方がいいかもしれません。A君は進学校に行ったものの、不登校を経て中退しました。工業高校に入り直しましたが、本当は最初からそうしたかったけれど、親の期待感を読んで進学校にしてしまったそうです。A君は自分の希望を中学時代話さなかったし、親にとっては寝耳に水でしたが、しばらく不登校で葛藤した後、両親は新たな選択を受け入れたそうです。卒業後就職しましたが、今も楽しく生き生きと仕事をしています。きっとA君のやり直したいという気持ちを受け入れ、親として応援できたからなのでしょう。